

真木

第 200 号

〒260-0852
 千葉市中央区青葉町
 1274-14
 加藤峰子方
 千葉県俳句作家協会
 事務局
 TEL 043-225-7115

〒276-0042
 八千代市ゆりのき台3-4-1101
 前北かおる方
 「真木」編集部
 TEL 090-4363-3501

目 次

もう少しの我慢	会長 能村研三	1
第七回千葉県俳句大賞決まる		2
大賞受賞句集『金色』 抜井諒一	自選二十句	3
大賞受賞句集『雛篋筒』 福井隆子	自選二十句	4
第七回千葉県俳句大賞受賞者のことは、選評		5
青葉の森公園・俳句短冊展		6
令和四年新春交流俳句会（文音俳句会）		7
千葉県俳壇ニュース		8
ひろば、結社賞		9
会員著書紹介、新入会員一句、基金御礼、受贈誌より		10
事務局日誌、「真木」編集部変更のお知らせ		11

巻頭言

もう少しの我慢

会長 能村 研三



穏やかな年末年始を迎えられるだろうと思っただけなのに、オミクロン株の出現で全国の感染者が急増し始めました。一月の下旬から千葉県にも「蔓延防止等重点措置」が適用されることになり二月に予定されていた新春交流俳句会も急遽中止せざるを得なくなりました。

新型コロナウイルスの感染が全世界で拡大する中、コロナ禍による自粛生活も三年目に入りました。

昨秋の千葉県俳句大会は、会場を使つての俳句大会は開催出来ませんでした。句会では文音による俳句大会となりました。そして千葉県文化会館での授賞式だけは開催することが出来、受賞者の方々をお呼び出来たことは良かったと思います。

私たちが愛好する俳句の世界は一般的には俳句会という人と人との交流があつてこそ成り立つものですが、それが自由に出来ないことは残念なことでもあります。また、私たち俳人は四季折々の風物に触れることも句を作る上では大切なことですが、これも制限されていることは大変窮屈なことでもあります。

当協会では担当係の尽力により文音句会的方式で句会を進めていた。だいたいしていることは大変有り難いことです。また、普段から親しい人たちの間では、インターネットを利用したオンライン句会を開催していることもよいことだと思います。

また、年四回発行される、千葉県俳句作家協会の機関誌「真木」は本号で二百号となりました。本号からは前北かおるさんが担当していただくことになりましたが、これまで長年の間、発行編集を一手に引き受けていただいた石井紀美子さんのご尽力には心より感謝いたします。また、木更津の印刷会社、川名印刷の皆さまのご尽力にも感謝したいと思います。

今年は寅年です。十干十二支では壬寅（みずのえ・とら）。「寅」の字については中国の歴史書によれば「春の胎動、春の象徴。草木が生ずる、成長、発育、誕生の意」とのこと。「壬寅」は厳しい冬を越えて、万物が芽吹き始め、新しい成長の礎となる年、ということになるそうなので、一日も早くコロナの収束を願う以前のような日常が戻ってくることを祈りたいと思います。

第7回千葉県俳句大賞決まる

千葉県俳句作家協会では千葉県内に居住する作家が、毎年十二月一日より翌年の十一月末日までに刊行した句集を対象に「千葉県俳句大賞」を設定し表彰を行っている。作品は自薦・他薦を問わず、また当協会に加盟の有無も問わず、選考事務局に送付された全句集が対象である。

本年は十二冊の応募があった。各作家による各自の句集より、自選二十句を選者六人に前もって配布、検討を依頼した。

昨年十二月十八日、依然としてコロナ禍を心配されるなか感染予防策を取りながらホテル「プラザ菜の花」に於いて選考会を開催、六人の選考委員（一人書面参加）により真剣な討議を交わし、左記のとおり本年度の受賞句集が決定した。本年は大賞二句集（準賞・奨励賞、該当無し）とした。

大賞の福井隆子は既に定評のある俳句作家であるが、抜井諒一は未だ四十歳の新進気鋭の作家。今後の躍進に大いなる期待がかかる。

一冊一冊の句集をさまざまな角度から検討、熱の籠った討議がなされたことを付記する。

◎第七回 千葉県俳句大賞

句集『雛篋筒』	福井隆子
ふらんす堂	(二〇二一年 刊行)
句集『金色』	抜井諒一
角川書店	(二〇二一年 刊行)

選考委員は俳人協会・現代俳句協会・伝統俳句協会の三団体で当協会所属の作家たち。それぞれの協会の枠を超えた真剣な討議の場である。さらに広く県内の俳人の功績を顕彰してゆきたく、来期も奮っての皆様に応募を期待している。(村上喜代子)

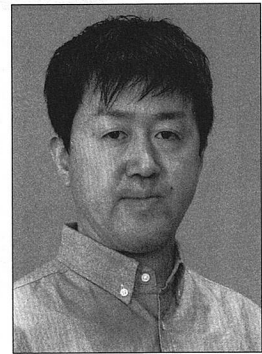
選考委員

能村研三	増成栗人	三枝かずを	塩野谷仁	秋尾敏	村上喜代子
------	------	-------	------	-----	-------



俳句大賞選考会

大賞



句集『金色』

抜井 諒一 自選二十句

市川市在住。「群青」同人。第一回星野立子新人賞受賞、第六十五回角川俳句賞受賞。句集『真青』。昭和五十七年群馬県生まれ。

消灯の一瞬白き春の闇	花火とは別の夜空へ帰りたる
吹く人を誰も見てゐぬ石鱖玉	照らされてゐるうち月と繋がりぬ
翻る火のうら暗き野焼かな	拳からばつたの脚の出てをりぬ
風船の中の太陽ふくらます	向いてゐる方へは飛べぬばつたかな
遠蛙ときをりすぐそこの蛙	ひるがへる鷺に朝日のかつと赤
元の瀬へ囀となりて戻る鮎	日の差して凍湖の傷の光りけり
翅広げ天道虫の落ちにけり	蜜柑より小さき両手で剥いてをり
飲み干して風より軽き缶麦酒	綿虫にてのひら熱すぎはせぬか
噴水のなか零歳児一歳児	日当たりて金色となる冬の蠅
ごきぶりの触覚闇を探しをり	風花の止みてどこにも無かりけり

大賞



句集『雛篔篁』

福井隆子 自選二十句

八千代市在住。「対岸」同人。俳人協会評議員、日本文藝家協会会員。
句集『ちぎり絵』『新調』『つぎつぎと』『手毬唄』『自註現代俳句シリーズ』
『福井隆子集』、『エッセイ集』『ある狂女の話』。昭和十五年北海道生まれ。

冬林橋祈りのごとく一つ置く	鬼灯を鳴らすは母を呼ぶごとし
実梅落つ海にも似たる青シート	古雛なれば遠くを見てゐたり
子の部屋のピアノが鳴れり青葉の夜	源五郎とは大叔父の名なりけり
この家のまん中に置き水中花	誰よりも影濃き父の日向ぼこ
繭玉が揺れ浅草の揺るるかな	新聞をかざりと開き雪来るか
刃物屋に冬麗の青ただよへり	ふはと身を回してまとふ春コート
爽やかは健やか夫の良く笑ふ	雛篔篁母の篔篁に似たるかな
マフラーを巻いて別れの顔となる	秋気澄み土偶臨月かも知れず
昼寝とはふつと己の消ゆること	子規はいつもの横顔を見せ小鳥来る
荒縄をもて夕萩の括られし	水吸うて豆のふくるる良夜なり

第七回 千葉県俳句大賞

受賞者のことば

大賞

抜井 諒一

このたびは栄えある第七回千葉県俳句大賞を賜り、誠にありがとうございます。ご推薦いただきました千葉県俳句作家協会の皆様から感謝申し上げます。また、村上喜代子先生にお声がけいただいたことが、今回の応募のきっかけとなりました。重ねて感謝申し上げます。句集『金色』は、第六十五回角川俳句賞受賞作である「鷲に朝日」を中心に、平成二十八年から令和二年までの句を収録した、第一句集『真青』に続く第二句集となります。

私事ながら、山本素竹に師事して俳句の道を歩み、現在まで俳句同人誌『群青』で鍛錬を積んできました。平成二十五年に出身地である群馬県高崎市から千葉県市川市に転居してまいりましたので、『真青』が群馬時代の句であるならば、今回の『金色』は千葉時代の句となります。そういった意味でも、今回の受賞は大変うれしく思います。自然から得る神秘的な感覚を五七五で表現したいと考えており、今回の受賞をきっかけとして、自身の俳句のさらなる可能性を探りたいと思います。また、千葉県は暮らしやすく、年々、自然に

も魅せられています。これからも、この素晴らしい風光に接し、感興の赴くままに俳句が作れたら幸いです。

大賞

福井 隆子

この度は第七回「千葉県俳句大賞」を頂き、誠に有難うございます。『雛筆筒』は私の第五句集でございます。自分の年齢や健康状態から見て第五句集出版は無理と半ば諦めていたところ、師や句友達から励まされ、思い切って上梓となった次第です。

俳句を始めましたのは三十代の半ば過ぎでした。転勤族の夫に従って転居を重ねました。その淋しさから、その地の小さな書店で出会った俳句雑誌で「沖」を知り、入会致しました。厳しいと聞いていた能村登四郎、林翔先生は、全くの初心者の方にとても優しく接して下さいました。

その頃の句会には当時二十代で独身、長身でスマートな「研三さん」もいらしていました。年の離れた弟のような感じで、未だに「研三先生」と呼びにくい理由となっております。

その後、茨城県鹿島時代にお世話になりました今瀬剛一先生が「対岸」を創刊されることになり、少しでもお役に立てたらという思いで「対岸」に入会することを決意致しました。気持ち良く「対岸」入会を認め、励まして下さったのも能村先生と林先生でした。皆様に励まされ、育てられて来たことを今改めて思い出されてなりません。これを励みとして体力、気力の許す限り、今後俳句に向き合っていくと思っております。

第七回 千葉県俳句大賞選評

大賞句集『金色』選評

秋尾 敏

自分自身の言葉が突き詰められている句集である。平明にあるがままを語っているようでありながら、言葉の奥に作者独自の世界が展開されていて、それが充実した読後感を生み出している。

草の絮あらかた草に引つかかる

例えばこの句の「草」のリフレインには、自分自身を阻害している現実がほのかに暗示されていて、そのほのかさが心に沁みる。見方を変えようという意図的な行為ではなく、純粋に見ることを突き詰めることによって生まれた表現であろう。おそらくこの作者には、それぞれの事象が最初からそう見えたということなのであろう。

ねんねこの中より雨を見てをりぬ

幼いころの、まだ抽象概念を覚える以前の自分の言葉を、そのまま育ててきたのであろう。三十歳代の句集とは思えない深さと安定感があるが、さらなる展開をも予感させる大きさも感じさせる。これからの千葉県俳句を託するにふさわしい句集として、千葉県俳句大賞を贈りたい。

大賞句集『雛筆筒』選評

能村 研三

『雛筆筒』は福井隆子さんの第五句集。令和二年までの九年間の作品三二二句を収めている。昭和五十二年に「沖」に入会、私とも同じ結社で机を並べたこともある方。その後、今瀬剛一氏の「対岸」に創刊同人として参加。俳人は自らの主張を持たなければならぬと、実作と共に文章を書く方でこれまでにエッセイ集も出されている。句集名は今も実家で師の使用しているその母の遺品の雛筆筒に所以するという。

冬林檎祈りのごとく一つ置く

沈めらるること嬉しくて浮いてこい

古雛なれば遠くを見てゐたり

音一つ立てぬ目高を家族とす

新聞をかざりと開き雪来るか

日常をひたむきな姿勢で歩みつつも、詩的な想像力に働く力は鋭く、静かながらも燃える叙情性をもって俳句を詠む作家である。

第7回千葉県俳句大賞選考対象句集

番号	賞	句集名	著者	刊行年月日	刊行出版社	現住所	所属結社
1		白牡丹有情	郡 千恵子	21.04.20	NHK学園	香取市	鷗
2		九州男児	徳吉 洋二郎	21.03.20	文學の森	千葉市	響 焰
3		それでいい	竹下 喜代子	21.08.22	ふらんす堂	八千代市	いには
4		一陣の風	岩本 功志	21.09.10	沓岐坂書房	柏市	野 火
5	大賞	金 色	抜井 諒一	21.08.25	角川文化	市川市	群 青
6		遍 舟	荒木 甫	21.02.15	ウエップ	柏市	鷗
7	大賞	雛篋笥	福井 隆子	21.09.01	ふらんす堂	八千代市	対 岸
8		五風十雨	相川 健	21.10.23	健康実践研	我孫子市	鴻
9		余 韻	能松 祐子	20.12.08	サンエー	千葉市	ろんど
10		彩 雲	相原 一枝	21.11.03	好日俳句会	千葉市	好 日
11		はからひ	藤枝 昌文	21.11.20	本阿弥書店	八千代市	若 葉
12		森	加藤 又三郎	21.08.30	邑書林	松戸市	鷹

青葉の森公園・俳句短冊展

千葉県俳句作家協会では、二月四日(金)十三日(日)まで「青葉の森公園・俳句短冊展」を開催した。同展は、青葉の森公園芸術文化ホールの「みんなで能舞台に触れるWEEK!」の一環として企画されたもの。二階展示室を会場に協会の役員、理事三十二名の揮毫した短冊を、解説や写真とともに展示した。また、年間の活動を紹介したパネルや、千葉県俳句大賞受賞句集等も用意し、広く協会の活動をPRした。

展示された俳句(一部)

整へぬことが爽気と生態園

能村 研三

いちにちを遊子となりて花の下

増成 栗人

黄落の奥は水なきエンタシス

(副会長・鴻主宰)
秋尾 敏

囀れり思ひ邪よこしまなかりけり

(副会長・軸主宰)
北川 昭久

ひびき合う光よ風よ花万朶

(副会長・天為同人)
石井紀美子

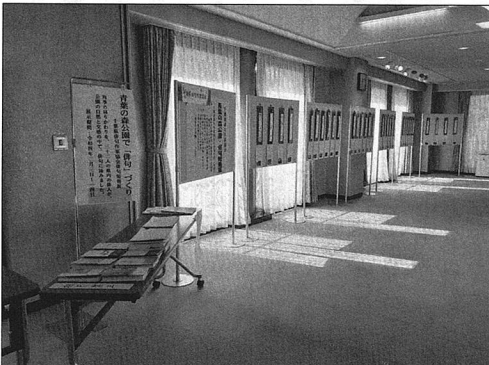
冬至晴橋を渡れば見ゆるもの

(理事長・岳会員)
高橋 健文

冬の蜘蛛脇の甘さを吹かれをり

(副理事長・好日主宰)
加藤 峰子

(事務局長・嶋代表)



会場風景



展示された俳句(一部)



令和四年新春交流俳句会（文音）

令和四年の新春交流俳句会はコロナ禍のため文音句会とした。一人二句、延べ九十九名、一九八句が集まった。当初、二月十三日に協会役員、理事と俳句大賞受賞者が集まり、新春交流会、千葉県俳句大賞贈賞式を行うことが予定されていた。その席上で、披講及び点盛を行い、出席している入賞者については賞品を授与する計画だった。しかし、千葉県にも蔓延防止等重点措置が発出される状況となり、新春交流会は中止、俳句大賞贈賞式も延期された。そこで、高橋健文、稗田寿明、平岡育也、前北かおる、祐森司各理事により点盛を行い、誌面にて結果発表、賞品は郵送することとした。

特選句及び入賞者の代表句は別記の通り。

（平岡育也記）

文音俳句作品集

【特選句】

能村研三会長特選

一陽来復生絹の色の雲流れ

原 瞳子

増成栗人副会長特選

木漏れ日を余さず拾ふ障子かな

平本 雅晴

秋尾敏副会長特選

錠剤の楕円の翳り雪がくる

祐 森司

北川昭久副会長特選

開きゆく屏風は虎を放ちけり

平本 雅晴

石井紀美子理事長特選

さよならの手を凧の高さまで

飯田 晴

高橋健文副理事長特選

地に降りてよりどんぐりの貌となる中村 世都

加藤峰子事務局長特選

開きゆく屏風は虎を放ちけり 平本 雅晴

塩野谷仁顧問特選

枯葦の葉ずれの音を聞きにゆく 相川 健

川合憲子顧問特選

みち草は金木犀の風のなか 谷本 元子

入賞者と代表作品

（二句合計得点、○数字は順位、一句のみ記す）

① 海ばかり見ている人と年惜しむ 11点 塩野谷 仁

② さよならの手を凧の高さまで 10点 飯田 晴

③ 人影のやうに冬木の昏れゆけり 9点 染谷 卓

④ 伐採の冬日もろとも倒れ来る 9点 能美昌二郎

⑤ 開きゆく屏風は虎を放ちけり 8点 平本 雅晴

⑥ 錠剤の楕円の翳り雪がくる 7点 祐 森司

⑦ どの子にもでかい青空卒業す 7点 増田都美子

⑧ 冬夕焼動く切り絵となりし町 6点 広上 あい

⑨ あたかや大きく開く仁王の手 6点 福井 隆子

⑩ 声高き海女の背籠の野水仙 6点 奥井 あき

⑪ ひとり暮しの自由不自由浮寝鳥 6点 石橋みちこ

⑫ 地に降りてよりどんぐりの貌となる 5点 中村 世都

⑬ 風花の記憶のかけら舞ふやうに 5点 多胡たかし

⑭ 毛糸編む平らな時間の真ん中に 5点 吉田 叔子

⑮ 小気味よく晴れて飛翔の青鷹 5点 佐久間由子

⑯ 白といふ重さが鎮座鏡餅 5点 藤岡 貞夫

⑰ 枯葦の葉ずれの音を聞きにゆく 5点 相川 健

⑱ 霜降る夜むかしばなしに鬼のある 4点 望月 百代

⑲ 葉隠れのうす日集めて枇杷の花 4点 石山 幸月

⑳ 薄水の光となりて解けゆけり 4点 茶谷 静子

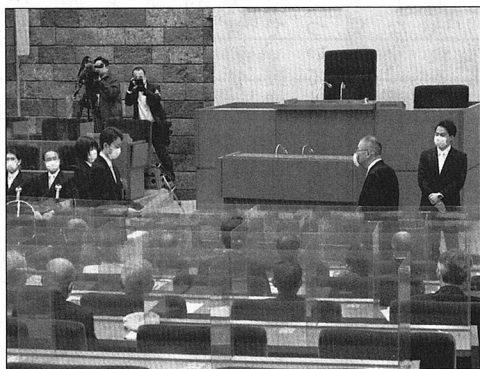
㉑ 追憶という名のリズム枯葉踏む 4点 倉岡 けい

千葉県俳壇ニユース

令和三年文化の日 千葉県功労者表彰

令和三年十一月三日、千葉県議会議場において令和三年文化の日千葉県功労者表彰が行われた。当協会の能村研三会長が、熊谷俊人知事から文化功労の表彰を受けた。会長のコメントは、以下の通り。

この名誉ある賞を頂きましたことを大変嬉しく思っております。改めて皆様の日頃のお力添えに感謝申し上げます。今後も精進し、俳句界の発展に努めて参ります。



表彰風景

令和三年度 市川市芸術祭

第七十三回 市川市市民俳句大会

日時 令和三年十一月

共催 市川市・市川市俳句協会

四季雑詠、一組二句、出句四三四句

上位入賞作品（○内は順位）

- ① 新菓の香りに納屋の膨らめり 諸岡 和子
- ② 迎火のひとつは胸の奥に焚く 良知 悦郎
- ③ もう一度春満月を見てねむる 古澤 春美
- ④ 紙風船子が吹き母が息を足す 御馬舎義道
- ⑤ なんざいと問へば爽やか指二本 猪瀬 達朗
- ⑥ 新米の荷札に母の太き文字 柿内 清一
- ⑦ 長き夜の電子辞書より鳥の声 笠井 敦子
- ⑧ かのことは山椒魚になら話す 朝長美智子
- ⑨ 蟪蛄の群れることなき面構へ 栗原 公子
- ⑩ 火口湖は神の手鏡鷹渡る 石崎 和夫
- ⑪ 裏方はみな割烹着村祭 長岡ルリ子
- ⑫ 深秋の古書肆の奥にカレーの香 三浦 光子
- ⑬ 草の絮今なら何処へでも行ける 有田川あき
- ⑭ 麦秋や働くほかの母しらず 菅野 裕夫
- ⑮ あれこれと干して一戸や葛の花 広渡 敬雄
- ⑯ 百日紅散り百日の地の湿り 中村 世都
- ⑰ 短夜やアロマオイルのひとつく 鈴木 豊子
- ⑱ ふるものなべて音生む望の夜 酒井 裕子
- ⑲ 肩で押す回転ドアや夏の果て 塙 誠一郎
- ⑳ 水澄むや駅には遠き長寿村 平城 静代

(楠原幹子記)

館山市俳句連盟主催

第七十四回 紙上俳句大会

新型コロナウイルスの感染の拡大を防ぐため、

館山市文化祭行事・芸術文化協会の行事も、昨年に引き続き全面中止となった。当連盟では、俳句集会をせず、紙上句会を実施した。そして、令和三年十一月一日、詠草集を発行した。安房郡内外から九十六人の応募があり、全二八八句を、8人の選者で選考し、上位入賞者十人が決まった。

上位入賞者（○内は順位）

- ① 地下足袋のコハゼぎつちり秋思断つ 川上 惇
- ② 夏草を引いて八十路のスクワット 小林 肇
- ③ みどり児の耳たぶ透きて紅葉晴 粕谷 艦水
- ④ いつからか子が聞き役や虫時雨 田中 信子
- ⑤ 銀河降るホームひとつの無人駅 朝生 昭子
- ⑥ コスモスや女子高生は脱皮する 角口 秀子
- ⑦ その日まで畑仕事を天の川 上野寿栄子
- ⑧ 花の名はだれも知らない水中花 田沼美智子
- ⑨ 夜すがらの靱乾燥機灯のともる 白井 淳子
- ⑩ 赤とんぼ空の五線譜縦横に 金光 浩彰

(庄司風樹 報)

NHK学園秋の誌上俳句大会

NHK学園による令和三年度秋の誌上俳句大会が開催され、当協会会員の吉野正一氏がNHK学園秋の誌上俳句大会大賞を受賞した。

咳の子を鬼が見逃す隠れんぼ

吉野 正一

「ろんど」創刊三十周年記念号

「ろんど」が創刊三十周年を迎え、令和四年一月号を記念号として発行した。慶祝。グラビアページのほか、創刊主宰鳥居おさむ氏の「創刊の辞」「俳誌ろんど創刊趣意書のあらまし」を再掲。すずき主宰「創刊三十周年に寄せて」さらに瑞々しく「ろんど」、田中貞雄名誉主宰「創刊三十周年を迎えて」に続いて、増成栗人氏が祝辞を寄せる。年表や各種行事の開催記録、句集出版の記録にもページを割き充実した記念号となっている。発表されたろんど賞については別掲。

● 結社賞 ●

ろんど賞 伊藤訓子

ひろば

県内吟行地案内

新川遊歩道・飯綱神社

東葉高速村上駅より徒歩五分程で新川沿岸に出る。両岸には「新川千本桜植栽事業」のもと染井吉野、河津桜をはじめ、十月桜といった様々な種類の桜が植えられており、四季を通じて花を楽しむことができる。八千代市ホームページには、植樹場所と開花時期を含む桜の特徴が掲載されている。野鳥の生息も豊で、夏には翡翠や川鶴、冬には鳩や鴨といった鳥の姿を目にする。また、沿岸の八千代中

初詣熊野古道の風荒し 訓子

ろんど新人賞 久保田晋一

人生はたかが百年石路の花 晋一

ろんど新人賞 佐藤正代

竹皮を脱ぐ今だから言えること 正代

（「ろんど」一月号より）

第一回青霞賞

青霞賞 平尾玲子

鉛筆の芯を濃くして目借時 玲子

（「初蝶」一月号より）

令和三年度野火賞

野火賞 森村和弘

攪拌のビーカーやがて水温む 和弘

新人賞 小坂由紀

中央書館にはカフェも併設されており、吟行の足を休めることも可能だ。

北に少し足を伸ばすと、飯綱神社がある。

本殿ならびに鐘楼等は八千代市指定文化財として登録されている歴史ある建物だ。境内には、紫陽花、山茶花その他、四季を通して季節が溢れている。また、樹齢四百五十年を越える公孫樹が神木として祀られており、黄葉が見事なことは言うまでもない。ちよつとした高台にあるこの神社からは、新川の流れはもちろ

ろん、沿岸に広がる田園風景、天気が良ければ遠くに筑波山を見ることが出来る。

（夏潮 永田泰三）

ミルフィーユ皿に崩るる夏の果 由紀

九〇〇号記念特別賞 上石みち子

高稲架の磐の如し衣川 みち子

九〇〇号記念特別賞 鶴沢よしえ

古里の浅草恋し秋時雨 よしえ

九〇〇号記念特別賞 大越千代

昼ひとりパンと林檎と目玉焼 千代

（「野火」一月号より）

令和三年度 鳴賞 鳴新人賞

鳴賞 山内洋光 奥井あき

鳴新人賞 西村とうじ

（「鳴」一月号より）

好日賞

好日賞 寺内由美

もの想ふ詩の入口や秋の雲 由美

青雲賞 北村土守

落葉舞ふパリの五差路に迷ひけり 土守

白雲賞 菱川瑞枝

ささげ干す筵四枚寺日和 瑞枝

年度賞 塚田佳都子

東山三十二峰の虫しぐれ 佳都子

（「好日」一月号より）

令和四年度沖・結社賞

第五十回沖賞 大川ゆかり

草笛を言葉のやうに吹きゐたる ゆかり

第五十回沖賞 小野寿子

冬羽織小町の絵とてあざやかに 寿子

第五十回新人賞 澤田英紀

荒波を統ぶる鯨の尾の太し 英紀

（「沖」一月号より）

会員著書紹介

●『俳句で巡る日本の樹木50選』 広渡敬雄著

著者は、「沖」同人で、平成二十四年に第五十八回角川俳句賞を受賞している。本書は、『俳壇』に四年間連載された「日本の樹木十二選」に二編を加えて書籍化したもの。「杉（熊野古道・大門坂）」に始まり、「石榴（神戸）」まで五十種の樹木をカラー写真とともに紹介する。樹木の解説だけでなく、その最適地「樹木の俳枕」が示されているところがユニークだが、全て著者が自ら訪ねた地とのこと。掲載された古今の例句も樹木の多面的な理解に役立ち、吟行地へのお伴にも好適の一書。

(令和三年八月発行・本阿弥書店)

●句集『五風十雨』 相川健著

著者は、我孫子市市民講座で俳句を始め、現在は「鴻」同人。本書は、平成二十年以来の作品三〇四句を収録した第一句集。手賀沼を中心として豊かな自然に恵まれ、白樺派の文人達にも愛された我孫子に著者は在住する。その風光明媚な土地を明るく讚えた作品が特徴的な一冊。

- 立春のはがねびかりの水平線
- 毀つ家に泰山木の花ひらく
- 五風十雨梅の実色を得つつあり
- 残照の甲斐駒ヶ岳榎植の実

(令和三年十月発行・健康実践研究所)

●句集『襲』 平松うさぎ著

二〇〇九年以来の作品を収録した第一句集。著者は、「沖」同人として活躍する。また、合唱をはじめ多彩な趣味を持ち、経歴には「日本手工芸美術展覧会入賞（日本刺繍）」の記載もある。幅広い題材を、伝統文化に由来する美意識で彩った詠みぶりが印象的。ブルーの表紙も美しい。

- 秋麗や面の裏には朱のレ点
- 南南西の風泡立たす花ミモザ
- 貝寄風や接がれて壺となる破片
- 追鯉して春愁を断ち切りぬ

(令和四年一月発行・朔出版)

新入会員一句

- 羽化登仙今宵の月の煌煌と 相川 健
- 祭足袋揃へて眠る小若かな 小出美千代
- 銀漢や包の真中に煙穴 平松うさぎ
- 白菊は煙のやうに枯れゆけり 加世堂魯幸
- サッチモのだみ声揺るる鶏頭花 齊藤 信一

基金御礼 (令和四年一月三二日現在)

- 齋藤 哲子 野口 養子 中川 素子
- 久染 康子 川崎 直子 三枝かずを
- 佐藤 映二

(以上 二六口、五万二千元)

受贈誌より

- あびこ(三五七号) 染谷 卓
- 緑の下を抜ける松風蟻地獄 いには(一月号) 村上喜代子
- ひよんの笛鳴らせば亀の浮き上がる 浮巢(十二月号) 大木さつき
- 小鳥来る一湾望む松林 沖(一月号) 能村 研三
- 海鼠腸を吸り喉元細うせり 音信(十二月号) 白鳥紅星子
- 静かなる鯉の動きや石路の花 かずさホトトギス(六三〇号) 三枝かずを
- 日向まで転げて匂ふ実梅かな 響焰(一月号) 米田 規子
- 湧き上がる力いま欲し冬椿 草の実(十二月号) 逸見 真三
- 掌を埋む故郷のぬくみ今年米 鴻(一月号) 増成 栗人
- 文書かなシリウスがかの山稜に 好日(一月号) 高橋 健文
- 手のひらを水平にして雪迎ふ 雑草(十二月号) 実籾 繁
- ピラカンサ虚に居て実に入る如し 鳴(一月号) 加藤 峰子
- 朝霧を吸うて土偶の口肥大 軸(一月号) 秋尾 敏
- 夢を語ろう水源は大枯野 頼祭(一月号) 本田 攝子
- 元朝や清しきまでの日本晴

夏日(三八〇号)

初冬の空へ空へと螺旋階

望月 百代

野火(二月号)

ラガーマン湯気濛々と立ちあがる

菅野 孝夫

初蝶(二月号)

立冬や浮根が鉄を押し上げて

中山 和子

万象(二月号)

白鳥の十字連ねて飛来せり

内海 良太

ペガサス(十二月号)

式部の実ほろほろ風の覚え書き

羽村美和子

百鳥(一月号)

夕闇に白鳥残し山湖去る

大串 章

遊牧(一三六号)

草の穂の揺れの彼方の灯の一つ

塩野谷 仁

ろんど(一月号)

ひたすらに清心といふ菊の白

すずき巴里

千葉県俳句作家協会 運営基金のお願い

千葉県俳句作家協会のさらなる発展のため、運営基金を募集致します。皆様の積極的な協力をお願い申し上げます。

◇一口 二千円

◇送付先 千葉県俳句作家協会基金口

郵便振替 〇〇一四〇一〇一七九二〇八三

基金にご協力頂いた方のご芳名を会報「真木」に記し領収に替えさせて頂きます。

事務局日誌

◆第四回理事会 (出席者23名)

- 日時 令和3年11月20日(土) 14時から16時
会場 ホテルプラザ菜の花5階あやめ
議事 1 令和3年度千葉県俳句大会の報告について
2 令和3年度新春交流会について
3 第7回千葉県俳句大賞について
4 第35回及び第36回千葉県俳句作家協会賞について
5 千葉県文化振興財団からのお願い
6 会報「真木」二〇〇号について
7 その他 事務局報告

会員異動

新会員

- 相川 健(我孫子市) 小出美千代(市原市)
平松うさぎ(練馬区) 加世堂魯幸(千葉市)
斉藤 信一(柏市)

編集後記

前任の石井紀美子さんから編集長を引き継ぎました。軌道に乗るまで、過去の誌面にならって着実に発行していくつもりです。しばらく行き届かない点もあると思いますが、お力添えのほど宜しくお願い申し上げます。印刷会社も、今回から(株)常翔印刷さんにお世話になります。メールや打ち合わせにきめ細かに対応して下さい、安心して編集に専念できます。

さて、今号は二百号となります。大きな節目を担当することになった幸運に驚いております。また、大役を任せて下さった皆様に感謝申し上げます。(前北かおる)

「真木」編集部変更のお知らせ

千葉県俳句作家協会会報「真木」の編集部が変更になりました。今後、資料等は新編集部宛にお願いいたします。なお、大会報告等、メールにてお知らせいただけると大変ありがたいです。今後とも、「真木」にご協力くださりますよう、お願い申し上げます。

◆「真木」編集部

連絡先 〒二七六-〇〇四二
八千代市ゆりのき台三十四-1101
前北かおる 方
電話 〇九〇-四三六三-三五〇一
FAX 〇四七-七五〇-一四五五
メール maekitakaoru@yahoo.co.jp

歩いて俳句

創刊 鳥居三郎
師系 今井杏太郎

主宰 飯田 晴

雲発行所

〒276-0023 八千代市勝田台一丁目一
D-1005
電話&FAX 047-487-7127

心を満たす俳句

「鴻」俳句会

発行所 〒271-0087 松戸市三矢小台二丁目一六谷口方
電話 047-336-3450
FAX 047-336-1511

◆誌代/年間 一、〇〇〇円



主宰 増成栗人
師系 角川源義 吉田鴻司

月刊俳誌 鷗 (しぎ)

鳴俳句会
代表 加藤 峰子
創刊 田中 午次郎
再刊 伊藤 白潮

誌代1年 12,000円
(見本誌 500円)

〒260-0852
千葉市中央区青葉町 1274-14 加藤方

電話・FAX 043-225-7115
http://shigi-haikukai.com/

自然と人間の一体化を目指す

月刊 好日

名譽主宰 長峰竹芳
主宰 高橋健文

誌代 一年 一、二〇〇〇円(送料共)

〒270-0007 千葉県松戸市中金杉二丁目七八
電話 047-713-1649
振替 002501141278

好日俳句会

月刊俳誌 沖 (おき)

俳句ルネッサンス

主宰 能村 研三

新会員募集中

誌代 1年/15,600円
半年/17,800円
見本誌 1冊 800円

沖発行所
〒272-0021 市川市八幡6-16-19
TEL 047-334-4975
FAX 047-333-3051
振替 00170-6-161552

創刊50周年

軸俳句会

主宰 秋尾 敏

〒278-0005
野田市宮崎95-4
電話 04-7122-3921
Fax 050-5552-9110
84円切手3枚で見本誌贈呈

俳誌 あびこ

誌代(隔月刊) 一年 四〇〇〇円

〒270-1138 我孫子市下ケ戸二八五
TEL 047-718-2144
郵振替 00100141189074

あびこ俳句同好会

主宰 染谷 卓

一度きりの今を楽しむ

いには INDEA

主宰 村上喜代子

新会員歓迎・添削指導します。

誌代1年 12,000円(月刊)
半年 6,000円 見本誌 500円

— いには俳句会 —

〒276-0036
千葉県八千代市高津390-211
電話 047-458-1919
Fax 047-458-1895
振替 00280-9-131469
HP検索: いには俳句会

現代俳句同人誌 遊牧

代表 塩野谷 仁

同人費 一年 二〇〇〇円
誌友費 一年 六〇〇〇円

〒273-0033 船橋市本郷町五〇七-11307
電話 047-336-1081
FAX 047-325-7738

遊牧俳句会